

2026年 図書館総合展ウェビナー (オンライン開催)

歴史資料にみる地震の記録とその活用

－文理連携の糸口としての『ジャパンナレッジ版 史料纂集・群書類従』－

11月 5日 (木) 15:00~16:00

主催：紀伊國屋書店、協力：ネットアドバンス、八木書店

榎原 雅治 先生 (東京大学史料編纂所地震史料プロジェクト特任教授)

歴史資料には、地震や津波・噴火をはじめ、大雨・洪水など、過去の自然災害に関する記録が数多く残されています。本講演では、『史料纂集』の校訂者であり、『地震史料集テキストデータベース』の構築プロジェクトにも参加された榎原雅治先生にご講演いただきます。

歴史学の立場から地震学と連携し、双方の知見を活かした研究を実践してこられた先生に、ジャパンナレッジ版『史料纂集』『群書類従』を実際に検索しながら、「慶長地震」や「元禄地震」などの関連記事を解説いただきます。あわせて、災害史料を探し、読み解き、活用するための基礎知識や関連する外部データベース、ハザードマップなどの実際の活用例もご紹介いただきます。

レファレンスや地域資料の調査にも役立つ、歴史資料の実践的な活用法を考えます。

1957年生まれ。東京大学文学部国史学科卒、同大学大学院人文科学研究科博士課程中退、博士（文学）。東京大学史料編纂所長、東京大学史料編纂所・地震火山史料連携機構長などを歴任。専門は中世史、とくに荘園史・交通史。主要著書に『中世の東海道をゆく』（中公新書、2008年／吉川弘文館、2019年）、『室町幕府と地方の社会』（岩波新書、2016年）、『地図で考える中世』（吉川弘文館、2021年）、『歴史のなかの地震・噴火』（共著、東京大学出版会、2021年）など。『史料纂集 兼宣公記1～3』（校訂、八木書店、2012～2026年）ほか『大日本史料』『大日本古記録』『日本荘園絵図聚影』など史料の編纂にも携わる。現在、東京大学史料編纂所地震史料プロジェクト特任教授。



イベント開催にあたって

『史料纂集』は、日本の歴史・文化研究に欠かせない史料を翻刻・集成した一大叢書で、『大日本古記録』『大日本古文書』と並び、学界で最も信頼されるテキストとして280冊以上を刊行しています。このたび、2027年1月の『ジャパンナレッジ版 史料纂集』第5期（江戸①～③）リリースを記念し、フォーラムを開催いたします。

本フォーラムでは『ジャパンナレッジ版 史料纂集・群書類従』の図書館レファレンスや教育利用、文理融合研究での活用を視野に、歴史学と地震学の連携事例をご紹介します。図書館ご担当者様はもちろん、学生・研究者の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

以下のURLもしくはQRコードからお申込みいただけます（参加無料）

<https://forms.cloud.microsoft/r/sUL8dNVVSd>



イベントに参加・アンケートにご回答いただいた方に、
【特製カレンダー2027「加賀前田家伝来 前田育徳会の国宝」】（A4判）をプレゼント！



過去に開催したウェビナーの録画も公開中！

<https://japanknowledge.com/event/report/>



- ・ 現役図書館員がズバリ聞く 『ジャパナレッジ版 史料纂集』
『史料纂集』とは何かという入門的な話題から、全文検索を実装したジャパナレッジ版の使い方、紙書籍版との違い、図書館におけるレファレンス対応の具体例までを幅広く解説。
- ・ デジタル時代の古典文学研究のヒント集
古典文学研究に挑戦する学生にとってデータベースはどのように力を貸してくれるのか、データベースを実際に操作しながらジャパナレッジ版を利用するためのコツをわかりやすく紹介。
- ・ 辞書にない言葉をどう調べるか？
文献調査で辞書に載っていない言葉と出会ったらどうするか？ 様々な分野の研究で有効な、用例の収集におけるリサーチツールとしての『ジャパナレッジ版 史料纂集』活用法を具体的に紹介。
- ・ 『ジャパナレッジ版 史料纂集・群書類従』を使った時代考証のススメ
ジャパナレッジ版史料纂集・群書類従を使ってどのような時代考証・古文書考証が可能になるのか、歴史ドラマの古文書考証担当者が史料データベースのエンターテインメントへの活用術を紹介。
- ・ 『ジャパナレッジ版』で意外な発見！ 大学院生によるHow to文献調査
さらなる研究のために、専門分野を越えて幅広く文献を調査するにはどうすればよいのか。『ジャパナレッジ版 史料纂集』を実際の研究でどのように活用したのか、利用者である大学院生の具体的な経験をもとに、文献調査の進め方と活用のヒントを紹介。
- ・ 『史料纂集』校訂者が語る『ジャパナレッジ版』の現在と未来
東京大学史料編纂所で史料集の編纂に携わったわら、史料のデジタルデータ化・データベース化にも取り組んできた経験をもとに、紙の書籍とデジタルデータ、それぞれの特性と役割を解説。『史料纂集』『群書類従』のデジタル化が歴史研究にもたらす可能性と、これからの史料活用を考える。